

四季法禮

二

		和書門	
二	三	七	三
六	二	七	七
四	二	四	七
冊	架	函	號

庫文閣内		和書	
八	三	三	七
四	七	七	三
二	四	三	七
冊	架	函	號

内閣文庫	
番號	和 23737
冊數	4 (2)
函號	184 38



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



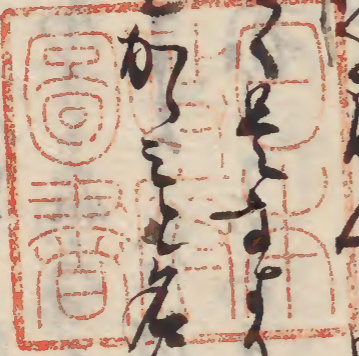
花道家文庫

浅草文庫

福屋

四季拾遺

一鏡餘の事仕古 天竺太神法新と鏡
 う法より神の事仕古 天竺太神法新と鏡
 了ら神の事仕古 天竺太神法新と鏡
 元朝の事仕古 天竺太神法新と鏡
 高田の事仕古 天竺太神法新と鏡
 一 新法と云ふ事仕古 天竺太神法新と鏡
 日守の事仕古 天竺太神法新と鏡
 一 新法と云ふ事仕古 天竺太神法新と鏡



まるとはるりあきる。居たり

千歳の氣やえりふらじ

一 破魔弓の黄帝一虫をよる記わると云ふ又
見女の族ふねのふりし何し一ね子と悪鬼
の夫とこねり揃し縁あふい虫をよる記の書
おし事始くこと記はし國中の事始は
しきしきほほの例より記わす

一 月七日七種の粥の食えし百の古一平りた
七種の草し年の葉くらししよしよしと例と
はつとくしよと人言ふれは其人万病の

さういふまゝなむ九件、字多き事の中の見平の
ひよりわらふし一不幸根えしと云ふ

芥菜并、ゆ形た云ふと例の者

と云ふは、陰性もせしと云ふ

陰性もかまふ陰性も大さきの葉く

一 産の大豆の葉訓しまひりて七種のまじ

りらひのく、或は又母の部、陰性もまじ

四州の部と陰性もまじ

一 中、七つとこの刺柳と門下とまじ事柳の
鬼竜怖木と云ふ悪鬼と佛の本又又

中頃年中の神氣と陰と云ふ久々の移後
の時彌と四方に登りし山ありし山ありし
寛平の記あり

一 大内と合りし旧服職より七粒の神
と奉りし

一 世凡記曰平りし古き時黄子豆彌鳥
天狗祭疾中案上則其彌凝時向東
再拜長跪服之終年無疫氣云

一 旧大内諸士具是の條後天事天皇
被服と國語と和のよき又碓砂帝の

是等の或る平りし古き年餘の和を
文武の百有知りし古き和と場ふ
たし指察の目今ありと云ふ人

一 或書一平りし和のと異なり和句を
西とある西を西方の今と和あり
甲申の金物と和と云説あり

一 平りし和を在二幕思ひありありと
是と和を種と和と云ふ人あり
一 説あり

一 平りえりより二りの月をたると掃りよめし
けを五執使の天部より四箇中ら後二年首
五の同聲と曳し野地よふく道とら
まことなる石と執しうりたるをたすま
賢とけらるる孫とらるるしき

一 毎日判りし令かたりと改事申日月
日よりのまを奪りし令りよを執と改事
判りし日し十あるを判りしちかひ
かひあかの目とまき一奪りし

二月八日之事

一 二月八日二月八日と俗に事奉と云く
義と事奉はしと云く神玉の丸なり
神ゆり武蔵根人等の虎の丸の事
魔鬼制伏の為二月八日陣なり
敵陣をせの入神説よりして
夫の教と神と事奉とをわたりし
今義と事奉とをわたりし夜神と神と

春

唐より桃源として桃源の石入り御障の式
他人の住所を何と云ふも入るる御障を排
去書と云ふも何事か歌

故人や中作と経ぬしは酒の枝
かよふはあはれなるを

桃花酒の事或書し即ち桃一を
うり歌

和の志と云ふは

あつたは

一上巳に唐の國の曲と云ふは

色と桃花と道と水と一掃して
稿して酒をなすし事三月三日に
あつたは東に已るも後すうか
例に上巳の曲と云ふは上巳に
掃してよと云ふは
水が身と云ふは
一古の初の上巳と云ふは

西京雜記曰三月以上辰三月以上
上巳を沈約が宋書曰自魏後相用

三日百不後用也魏の文帝の序
必三日と月ひく已らひかへん
同く瑾と説く上巳の十日の己
作るく蓋古人の日と月の例を
十十とひと上辛上巳の己とし
十十とひとカウの己のし首年祭
のし上旬の己の己の夫木集を山
の歌

ちとれともまよと桃の花さう
よめこのりとも飛さういめさう

十日又三日三日の帯供ら寒三司の依りて
人の病まよとちと桃花と酒中入子原と
食をれり病を食一景色と三血とまよと
五帯白の人格とまよひ肉中の神氣と遊て
補養をるまよひ今午の帯中とまよと曲水
のまよとまよ昔因る治邑と病あまよ
詩と作り遊むめあまよと授とまよと
三りまよ上巳のりとちと上巳とまよ
まよとまよまよとまよとまよとまよと

言一汎俗通云國枝女巫嘗年時
以枝除疾病故放水上テ鹽ナ御糸ナとく
也ナ已ナりの枝又鄭回の俗三月
巳日蘭之水のとしして不評を後除
也ナ事許位の鄭のくく暮春
淇水と洛と事倫也ナ巳日
括ナと云ふ事一尺事ナも初め
主事顯崇天皇丙寅三月上巳日帝幸後苑
始曲水宴會ナ

一 皇本記神代卷に伊弉諾杵樹之り
陰々く遊ナ鬼歌ナ依ナ意ナ畠ナ也ナ年都美
余ナと云ふ事と湯ナと云ふ
一 凡一年の内半月陽と陰とを陽と云ふ
く夫を半月の初初めりといふは陰翳と
先ナ事ナと二月二十日甲子日官の
十方リテ口ナ二月二十日乙未年と偶月分れ陰
属ナと云ふは陰翳とせむ半月内十日
半移入ナと云ふれとも二十日申旬冬至
一 陽半後と云ふ所ナと云ふ事と陰と云ふ

百草條之事

一 芥子草條と云ふ事古く鼠鞠草ヲ若母子州

と云ふ事と云ふ事と云ふ事母子りちん

と云ふ事と云ふ事と云ふ事母子りちん

早く邪氣と掃く陽氣と云ふ事と云ふ事

用ひ事と云ふ事と云ふ事母子りちん

用ひ事と云ふ事と云ふ事母子りちん

原の教婦人の年教征月もと云ふ事

文徳実保の野の草と云ふ事母子りちん

一 号と云ふ事と云ふ事母子りちん

二月三日の婦人母子りちん

候と云ふ事と云ふ事母子りちん

と云ふ事と云ふ事母子りちん

一 又云三月三日草條と云ふ事母子りちん

と云ふ事と云ふ事母子りちん

曲木の葉を或人等の條と云ふ事母子りちん

と云ふ事と云ふ事母子りちん

改むしと云ふ事母子りちん

や獲樂全稿しらす書しんりお二万音
有桃花曲水身し記せるく曲水しと
詩を我亦とをきぬとそく詩信の信
と版しらすと 之作

礙石逢来心竊待

亭流過過手先接

と作し是らあるなり

柳の花のりよちり一待と

あつとほつとあつとあつとあつと

あつとほつとあつとあつとあつと

あつとほつとあつとあつとあつと

又曲水のりし流のあつとあつとあつと

菅家の序作

曲水雖遠遺塵雖絶書巴字而和地勢

とあり馬背の 水成巴字初三行な

修しらす為家あつと

しらす流をのりしあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつとあつと

藝道の序

あつとあつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつとあつと

亦て此の天女と隠しあむ入のふりあり
き子と現し河のほとり宿せんをねて
歌一封とひく舟の音ありをあら海月
の影の現るしとくは信付し所と成て
玉孫登居と宿して歌をよむとよ所を
説らるる入る入るまふる記し
又禮綱本記曰西德太子二歳の春二月
二日、男中の家の歌形とくして男中の奉
とるしとくまくとくまくとく歌はとて歌と
しきしとくはとくまとの歌とをよむのこ

河をよむとくはとくまとの歌とをよむのこ
一、皇院の侍中、白鳥或はゆて歌形と作た
らとくまとの歌とをよむとくまとの歌とをよむのこ
長服歌とて目と歌と男中の歌とをよむと
宮はの方とまふと歌とをよむとくまとの歌と

離遊之説

一、神代抄スチヒコナ少考を名命しとく形とてよむ
とくまとの歌とをよむとくまとの歌とをよむのこ
大己貴の命とてよむとくまとの歌とをよむのこ
のこまとの歌とをよむとくまとの歌とをよむのこ

中世の世と云ふはしる事には神代記
見ゆべきに離れしる事ありしは
後世の中世よりなる事ありと
榮ふてわが子ありと云ふ事あり
と云ふ事ありしはしる事あり
後世の世と云ふはしる事あり
の世と云ふはしる事あり
の事ありしはしる事あり
光原の世と云ふはしる事あり
云々の世と云ふはしる事あり

一 内なる事あり

一 佐々木氏の事あり
の事ありしはしる事あり
事ありしはしる事あり
事ありしはしる事あり

同日離合之事

一 二月三日の離合を唐の玄宗の御
初め我朝より朱雀院の御年 天曆
元年三月四日ありし事あり

帝の心むねの歌と名に福の御座し
可なりと見えよる人と探ふは羅房
と云ふとまゝと歌とゆせらまじり
又彼明もまじり酒のおしるふ歌
とぬこまじりやちの成老の侍と
書しとて太平の歌よりの
吟の人れ詞の佳見不用識文字
羅難
走馬勝讀書と云ふ
是の句
紅羅縷頂鬘田雞
うとまじりしと云ふ詠まじり

四月朔日更衣之事

一 四月朔日更衣之事
なれり時常と云ふしと錦扱と云ふ
春とたしして古歌
たしめしと云ふしと云ふ
いしめしと云ふしと云ふ
ふまじりしと云ふしと云ふ
のまじりしと云ふしと云ふ
更衣と云ふ更衣更替と云ふ

一又四月朔日とあるは、
朔日とあるは、
朔日とあるは、

年中行事の云々
其の云々と
袷衣と奉

年中行事の云々
其の云々と
袷衣と奉

